

早損二付、御上御金御不手廻之段奉承知候、依之此度より御割合座ニ被遊候ハ、年々御益金も過分ニ相募可申様御隠密ニ奉願候所、尤之由御聞届願之通被仰付重々難有仕合奉存候、依之御割合座仕法左ニ奉申上候、

御勘定六十日限

但壱ヶ年六度宛

渡場

入口より請方
壁方より渡方

御立合可申請候事

表門

錢出入

右同断

勘定方

右同断

但シ、是は諸仕入物代金付計御改、尤金錢出入は年

寄役え御任可被下候事、

運送方

右同断

但、本有荷より六十日中入品御改、日々壁方え御渡

残荷高御改、

壁方

右同断

日々出来錢高書上

右御立合申請御改之上出来錢高御改、金壱両二付錢七貫貳百文相場にて代金御立被下、直違徳用之所は何程なりとも更ニ無御構、内金主え拙者より割賦等致候義少しも御吟味不被下、御年季中如何様之事にても御違交被下置間敷候由、御定被下候事、右年中出来錢高、御定錢金壱両二付七貫貳百文替代金御立、其内にて地鉄は不及申諸色御引去、殘金を以御益御上納可被下候

旨相定申候、併御益高壱ヶ年二付金壱万兩ニ都合不仕候ハ、其不足分は七貫貳百文直段違徳用之内より相足シ、都合仕可相納候御定申上候、尤壱万兩ニ相過候分は何程成共可指上候事、一、右七貫貳百文定相場違徳用之所は、内金主仲^間广え相渡候間、江戸表入用等其外私え御合力之義は、其年々御益高御積りを以可奉頂戴候事、

右之条々御定申上、御割合座ニ仕候上は、座方入用金并地鉄仕入金御手支等少しも相掛り申間敷候、尤御払錢一卷引請候上は、是又御不益無之様、当時迄之通私何分ニも執計御手支相掛申間敷候、為後日之御割合座定証文指上申候、仍如件、

明和八年卯六月

小澤九郎兵衛

大前仁兵衛

菊池三之右衛門殿

大内茂兵衛殿

(3—4 B1 45)

II (1) 9. (明和九年頃か) 鑄錢仕法につき口上書

口上書

一、鑄錢仕法座方取納等之事は、乍恐前々被分 聞召候御儀愚意

可申上所も更〔は〕二無御座候処、唯御用場之体二は御座候得共、元
 来商買人之掛引〔は〕此処御益之根本二御座候間、当役之私共去卯七
 月より当時迄之取扱は、先引請人九郎兵衛仕法之押形を以諸事
 取計、唯日夜之無事を取扱候迄之義二御座候、然ル処此度銃手〔指〕
 遣〔支〕此上も又候指支可有御座候哉、炭諸色も右二準難相心得奉
 存候、其専ハ諸商人共申口時々承居候所、時之変二随ひ候て相
 聞、更二治定無御座候、元来大騒成義二候得は、幾重二証文取
 堅候迎も、御指支と申所え至候ては、御權威之不及所二御座
 候、爰を以最早半年余得と手馴及手段諸事試候所、誠商家之法
 二て私共役筋之思慮にて不及処御座候、乍恐此所〔虫損、計方〕能々被遊御
 兼察候て、此上取納方被 仰出候より外更私共愚意外二可奉申
 上候義無御座奉存候、

一、埜方諸職人等取納之義は、全世語二申解候通座法・山法二
 て、御役法二ては一旦為相用候得共、其者共心底二不落罷在候
 故か、時々之変〔虫損〕及難義候得は此上諸職〔虫損、人〕御場所中門内は別国
 同前之御下知御座候様仕度奉存候、猶又門外は御別段とは乍申
 右準候間、鑄錢一統之義は、乍恐都て常之御法とは御別意も可
 有御座候哉奉存候事、

一、御益之義専一之御用場二御座候所、其筋より座方之難澁は悉
 時々相発申候歟と奉存候、此所乍恐不及筆頭候分は、限無之時
 は相勤候私共其外郡方手代等二至ル迄、昼夜此手段彼手段と一
 錢宛も御益相過候様相心懸吟味仕候心中〔虫損〕外事思慮之不及所ハ

心外〔虫損〕非道も有之候歟之様二相聞候、其専ハ御国商人座方へ相
 拘候者共より遠山之炭焼等迄、心底帰伏之様二は不相聞候、仍
 諸品二御手支時々相見申候、併前件之通、諸役人ハ不及申上、
 座方勤人共迄御益々々と誠二〔虫損〕立候取計を嘗被了仕候得共、
 仮二も悪敷ハ不被為申聞候義二御座候、左候へハ、此根元は全
 御益二限無之所より相発候故と愚意二は奉存候、御益限御座候
 得は、其程能二取計都てゆるミを付候事も御座候、〔虫損〕段炭焼方
 不足二相見候得は、直段を上ケ焼方募候得は、又直下ケを仕候
 など、申様成商家之工夫此処より行事相分候間、御益二御限有
 之候義、御座繁榮之基とも可罷成候哉、左候得は爰を以も役外
 之取計事二御座候は、詰ル所ハ商家之仕法より外二座方安穩之
 御仕法有御座間敷候哉と奉存候、

〔付箋〕
 一、御益のみ専一ニ仕候故、埜方懸り役人より座方勤人共迄一統鑄錢貫
 数相募候事計第一ニ出情下知仕候故、段々と出来錢之吟味薄ク罷成、当
 時之鑄錢は定座之出来錢よりは格別品不宜相見へ申候、此義は他国通用
 金之義御座候間、当時之世評のみニ不限末代悪錢之異名御座候てハ、御
 外見は不及申上如何様之故障出来可申候哉恐入奉存候、以後縦御益相減
 候共、出来錢仕御吟味強被遊候御下知御鑄錢座繁昌之根本之御義と奉存
 候、

右等之外更二可申上所存も無御座候、此義二付都て御益筋より先

キに奉申上候者共は皆自分之益分を申掠候手段と相聞一旦宜相聞候ても殊之外故障〔御座候哉〕共夥敷奉存候、

〔括抹消〕

唯々商家之者は百金を以千金之取引操合を仕候と申義は世上
一統之様ニ申候事ニ御座候得共、猶此節私共取計筋長ク行届
兼候ニ付、存当申候様ニ奉存候

此後は此一付別ニ御益筋相目論奉申上候者御座候共、更ニ御取上ケ不被遊候様專一之義ニ奉存候、右御取上〔虫損ケ〕被遊候得は、御了簡不相濟候内ニ世上及流布候故、入口仕候商人共ハ不及申上、山中之炭焼等迄ニ心を存候て、品々更ニ不貯様ニ相成候間、其筋より諸事悉指支相発隣〔虫損、国力〕迄商家騒動ニ相及候間、此上若御益御限りも相濟候御義ニも罷成候ハ、其後は鑄錢一件ニ付候てハ諸願不指出候様之御下知乍恐御座御繁栄之基と奉存候、此外之巨細之義ハ畢竟は右之余類ニて根本此段之外、愚意〔虫損〕及不申候、唯此上之所は宜御判談次第御下知奉願候、仍如件、

年号月日

(3 | 4 B1 86)

II (1) 10. 〔明和期〕 九月 江戸運送鑄錢御船印につき伺

江戸運送鑄錢御船印、先達て白地ニ紺丸水之御印、まねきも右同様ニ相濟申候所、外之荷と違諸人目ニ付候品ニ有之、其上近年川筋船掛場物騒ニ御座候由ニ相聞候へは、万一不慮之儀も御座候得は、上之御苦難ニ罷成恐入申候付、紺地丸水裾ニ久之字白クまねきハ白地紺丸水之御印ニ仕替候様仕度旨、別紙之通小沢九郎兵衛願申出候間、御故障之筋も無御座候ハ、願之通御濟被下置候様ニ仕度相窺申候、以上、

九月

佐々木政衛門

(3 | 4 B1 80)

II (1) 11. 〔安永四年正月 水戸鑄錢着船につき指願〕

一、領内鑄錢着船之節、御勘定所之相届可申候旨御達御座候、其節前日指出証文御藏方えも別紙指出可申哉、左候ハ、納日限刻限等御指図可被下候哉、

一、右錢積乗せ候船、何れ之御堀え為乗入可申哉、

但、舟乗入候上、水揚仕候場所相定り御座候哉、又は納当日出役候者、御役所之御届仕候砌、御指図被成候義ニ御座候哉、

一、右水揚人足之儀は、此方より為出候積りニ御座候、水揚之外

は御人出候義ニ御座候哉、

一、右錢積立御改請候場所、敷物等ニても持參為仕候義ニ御座候哉、其外持參為仕候品も御座候ハ、御指図被下度事、

但、雨天ニ付別段之取計も御座候哉、承知仕度事、

一、納錢之義ハ老貫文宛ニて封印仕、又五貫文一把ニ縮候所ニて封印、

但シ、右封印之義は領分鑄錢取扱候役人ニ為致候間、印鑑前日ニ指出置可申候哉、

右之趣、納方之義不案内ニ御座候間、書附指出候得共、猶又此外可心得義も有之候ハ、御指図申請度候、以上、

未 正月

(3-4 B1 57)

II (2) 1. [明和三年五月 砂鉄鑄錢座開設につき金主証文]

相定申証文之事

一、水戸御領松岡御郡下久慈濱より赤濱迄迄浜並古来より砂鉄悉打寄相見候二付、去ル寛保元酉春右砂鉄鑄立以其鉄鑄錢座御願相濟、既ニ砂鉄御吹立凡千貫目余出来候砌、江戸表錢座相止候ニ付以其御見合御国元錢座之義も相止其後打絶右御願も無之候所、此度前件之通浜々砂鉄吹立并ニ鑄錢座御願御指出被成候二

付、金主之義我々方へ御相談ニ付、其旨趣委細承届御請合仕候、左候得は此上 御上 御願相濟次第委は左ニ相定候通一々相違仕間敷候事、

一、^{〔前件〕}右砂鉄吹立并鑄錢座御願一卷ニ付、御城下表御 往復雜用万

事願入目之義は^{〔御願〕}縦御願相濟申候ハ、猶更之義、縦御願相濟不申候共、五分五歩ニ双方より指出可申候事、

一、前書之一件願相濟、砂鉄吹立并鑄錢ニ取懸候ハ、其筋之諸職人私共方ニて召抱指下シ御手使相掛申間敷候事、

一、砂鉄吹立鑄錢仕候場所之義ハ、罷下り見届御願主方へ御相談之上、最寄の場所え相建可申候、尤其節吹場・鑄場之絵図私共より指出シ家普請等之義ハ材木・竹・藁・繩^{〔御願主〕}大工・木挽等ハ不及申人歩・日雇等諸入目方ニて随分下直ニ上候様御世話^{を以御取立可被成候、其入目之義ハ御仕出候御勘定之表を以金子之義ハ金主元へ私共より指出、少も御勞苦ニ相掛ケ申間敷候事、}

一、砂鉄吹立并鑄錢仕候諸道具一卷、金主元ニて相仕立、右入目金願主方え一向相掛申間敷事、

一、砂鉄吹立并鑄錢仕候節は、御上え指上候御益筋并諸入目一卷引落、殘金徳用之分金百両ニ付分ケ六十兩金主四十兩願主と引分ケ可申候^{〔落手可仕候〕}、尤右勘定之節は願主・金主双方立合を以勘定相仕立可申候事、

附り、錢場・鑄場普請并諸道具代之義ハ諸掛り勘定之外ニ組置仕入目え組入申間敷候事、

万一右衛門殿

(3—4 B1 2)

一、金主方手代共并諸職人共山本え指下シ、願主方よりも御立合申請、幾年前吹立鑄錢仕候共、御国内之者共同様ニ御国内之御作法少も為相背申間敷候事、

II (2) 2. 「明和五年五月 鑄錢願主・金主取替証文」

砂鉄鑄錢座取替証文之事

一、砂鉄吹立鑄錢仕候ても、御上之御益も難指上ケ、我々徳分も無之、万一相仕舞之義も御座候ハ、其節ハ諸道具・家普請其外入目辻、願主方御損ニは相掛申間敷候事、

一、先達て貴殿於 水戸御領砂鉄鑄立鑄錢御願被成候所、此度蒙御免被為 仰付候所、相談之上我々金主証人ニ相立、仲間ニ

一、鑄錢吹立御上え御買上ケニ罷成候共、又ハ世上え相對払ニ被仰付候共、願主方・金主方立合之上にて何分之益御座候とも双方不得心敷、双方相隠シ自分々々之取計仕候義ハ、曾て仕間敷定候事、

て御屋形向一統ニ御請仕候所、相違無御座候、然上ハ、年々御定之御運上金并普請方其外諸入用我々請合候上ハ、鑄錢 御用方之儀は何成共手支候義ハ決て仕間敷候、御願相濟候通、当子年より午年迄七ヶ年之間、願主・金主無違乱相互ニ右年季無滞

右件定之條々、後日少も相違仕間敷候、尤、金高之義ハ入目元金何程相掛候共、少も無御手支、請合候私共より指出、願主方御苦勞ニ相掛間敷候、為其請人加印を以 定之証文相渡し候、仍如件、

相勤可申、金主三人之内入用金銘々当分ニ差出可申候、尤双方立合相談相極候上は、出金無間違出シ可申候、忝人たり共出金相滞鑄場延引ニ相成候儀も御座候ハ、其節相衆引請、御用少も無滞相勤可申候、尤相互ニ証文為取替置申候、万一右体之儀御座候節ハ、右証文之通相違仕間敷候事、

明和三年 戊五月

江戸表

金主方 五左衛門
たれ 万右衛門
たれ

水戸御領御願主方 五左衛門殿

一、鑄錢中、諸事相互ニ随分勘弁仕、余慶之物入無之様可仕候、猶又、諸事貴殿我等三人相談相和候上にて相極、自分々之存入相立申間敷候、若又理合難相決事も有之候ハ、縦不得心之事たり共、多分之了簡ニ附、自分之我俣相働申間敷候事、
一、金子之出入は金主方にて可仕候、併貴殿印形無之金子ハ、

年々五節句大勘定之節組入申間敷候事、

一、此度、御用被 仰付候二付、諸入用・普請金等初勘定より引取可申候、尤 御用向御指支無御座候、若又相滞候儀も御座候ハ、何分差支無之様取計意可申候、

一、願主・金主徳用金引分之儀は、御運上・諸入用都て出金之分引払、殘金願主方え四分、金主方え六分勘定可仕候、尤年中勘定願主・金主立合仕候節、内仲間之衆、万事差配二相拘申間敷候事、

一、願主・金主自分之徳用二相拘、諸事地鉄并米・味噌・炭・薪二至迄、世上現買相庭吟味仕、入口等之引請我俣二不仕、四人直段吟味之上二て勘定相立可申候事、

一、江戸会所之儀は、願主・金主自身諸事取計可申候、内仲間之衆御座候衆中ハ、其節計御用向二寄相頼候儀も可有之候、勿論召抱候者ハ願主・金主兩名二て請狀取置可申候、名代二罷出候者ハ名前書指出置可申候、諸事相談仕、会所諸役人・諸職人双方臍肩之沙汰不仕明白二相糺、縦縁家之輩たり共不行跡等猶其職二不至人は、早速相談之上取替可申候事、

一、鑄錢目方之儀、御定之通老錢八分五厘二鑄立、軽目・悪錢等仕立余慶之利徳相考不申、随分吟味仕、上々二為鑄立可申候事、

右之条々、後日二少も相違仕間敷候、并御国法等随分大切二為相

守可申候、尤 御用向并御役所向相互二申合、御用御間かき不申様大切二可仕候、右之趣相極候上ハ、貴殿え少も御苦勞掛申間敷候、為後日一札仍如件、

楠後文蔵

明和五子年五月六日

関岡五郎兵衛

小澤九郎兵衛殿

(3 | 4 B1 8)

II (2) 3. 「明和五年五月 鑄錢願主・金主取替証文」

砂鉄鑄錢座取替証之事

一、先達て貴殿於 水戸御領ニ砂鉄鑄立鑄錢御願被成候処、此度蒙 御免被為 仰付候処、相談之上我々金主証人ニ相立、仲間ニて御屋形向一統ニ御請仕候処、相違無御座候、然ル上ハ、年々御定之御運上金并普請方其外諸入用我々請合候上ハ、鑄錢御用方之儀ハ何成共手支候儀は決て仕間敷候、御願相濟候通、当子年より午年迄七ヶ年之間、願主・金主無違乱相互ニ右年季無滞相勤可申、金主三人之内入用金銘々当分差出可申候、尤双方立合相談相極候上は、出金無間違出シ可申候、老人たり共出金相滞り鑄場延引ニ相成候儀も御座候ハ、其節相衆引請 御

用少も相滞り不申候様相勤可申候、尤相互ニ証文取為替置申候、万一右体之儀御座候節ハ、右証文之通相違仕間鋪候事、

一、鑄錢中、諸事相互ニ随分勘弁仕、余慶之物入無之様可仕候、猶又、諸事貴殿我等三人相談相和候上ニて相極、自分々之存入相立申間鋪候、若又、理合難相決候事も有之候ハ、縦不得心之事たり共、多分之了簡ニ附、自分之我俣相勤申間敷事、

一、金子之出入は金主方ニて可仕候、併貴殿印形無之金子は、年々五節句前大勘定之節組入申間敷事、

一、此度、御用被仰付候ニ付、諸入用普請金等初勘定より引取可申候、尤御用向御差支無御座候、若又、相滞候儀も御座候ハ、何分差支無之様取計意可申候、

一、願主・金主徳用金引分ケ之儀は、御運上・諸入用都て出金之分引払、殘金願主方え五分、金主方え五分勘定可仕候、尤年中勘定願主・金主立合仕候節、内仲間之衆万事差配ニ相拘り申間敷候事、

一、願主・金主自分之徳用ニ相拘り、諸事地鉄并米・味噌・炭・薪ニ至迄、世上現買ニ相庭吟味仕、入口等之引請我俣ニ不仕、四人直段吟味之上ニて勘定相立可申候事、

一、江戸会所之儀は、願主・金主自身諸事取計可申候、内仲間之衆御座候衆中ハ、其節御用向ニ寄相頼候儀も可有之候、勿論召抱候者ハ願主・金主兩名ニて請状取置可申候、名代罷出候者ハ名前書差出し置可申候、諸事相談仕、会所諸役人・諸職人双

方最眞之沙汰不仕明白ニ相糺シ、縦縁家之輩たり共不行跡等猶其織^(兼)ニ不至人は、早速相談之上取替可申候事、

一、鑄錢目方之儀、御定之通老錢八分五厘ニ鑄立、輕目・惡錢等仕立余慶之利徳相老^(考)不申、随分吟味仕、上々ニ為鑄立可申候事、

右之条々、後日少も相違仕間敷候、并御国法等随分大切ニ為相守可申候、尤御用向并御役所向相互ニ申合、御用御間かき不申様大切ニ可仕候、右之趣相極候上は、貴殿え少も御苦勞掛申間鋪候、為後日一札仍如件、

明和五子年五月六日

楠後文藏 ㊦

関岡五郎兵衛 ㊦

銅屋太兵衛 ㊦

小沢九郎兵衛殿

(3—4 B1 9)

II (2) 4. 「明和五年五月 金主相談中人謝礼につき証文」

相渡申証文之事

一、仲^(間)廣割壹分五厘 但、徳用之内拾四二割

— II. 鑄錢座運營 —

右は、水戸御領太田砂鉄鑄錢座願主え、金主御相談中人二相立、我々取計相極メ候付、前書之割合、年々年季中御勘定之節、為謝礼可被相渡旨、証文請取候二付、為取替証文為後日相渡申候、仍如件、

明和五年子五月十九日

小森助右衛門 印
鶴間清藏 印
伊豆屋儀七 印

小沢九郎兵衛殿

(3 | 4 B1 10)

II (2) 5. 「明和五年五月 入用金子納方につき証文」

相渡申一札之事

一、金百兩は 五月廿日渡シ
一、金百兩は 五月廿五日同断
一、金千五百兩は 六月朔日上納
一、金五百兩は 六月六日同断

右金子相渡候御約束、中人中以立合相極メ候間、日限無相違相渡

可申候、尤御国許御郡役所え土地方請取二六月六日出立二御願越候由、此旨承知仕候、右日限前、万事取計其節少も御手支相掛申間敷候、為其一札如此御座候、仍如件、

明和五年子五月十九日 金主

楠後文藏 印
銅屋太兵衛 印
関岡五郎兵衛 印
朽木屋清藏 印
吉田屋太郎右衛門 印
小森助右衛門 印
伊豆屋義七 印

小沢九郎兵衛殿

(3 | 4 B1 11)

II (2) 6. 「(明和五年) 金主請書」

指上申御請書之事

一、此度御領内於太田村御国産之砂鉄にて鑄錢仕度旨、御国内大庄屋小沢九郎兵衛右之願指上候付、御公儀えも御届之上、願之通右之願主方へ被 仰付候由二付、江戸表未判之我々私共え金主内談有之候処、右之旨悉承知仕候付、則内談相決、願主案内にて、当月六日御殿え 我々三人一同罷上候て、金主之御

請申上候所、此後相違仕間敷旨蒙仰難有奉承知候事、

*末ノ文入

〔併御定之年季中、万一脇々より御益金高相過願出候者有之共願主・金主

御立替不被仰付候等ニ御定難被仰付候、此度願主・金主一同御受書候事、

一、砂鉄鑄錢年季中、老ケ年金五千両宛之御益金願主方え少も苦

難ニ不相掛御下知次第、金主之私共より屹ト上納可仕候、万一

三人金主之内相滞申候者も有之候ハ、仲广ニて引受上納可仕

候、若又三人共ニ相滞申候ハ、金主御立替其節迄之指出候金普

請金立替被仰付候共、無違背相請取可申候、其節普請入用并

跡々迄ニ相掛候元来等之金子出金之分は、是又後金主鑄錢吹立

之後、金高ハ其節之以了簡相受取可申候、其節少も御恨申上間

敷候御事、

(一)括抹消

一、鑄錢目方等都て修法等江戶表定座え願主九郎兵衛為欠合

御尋之上被仰付候義ニ候間、何分願主方指図申請、

一、鑄錢之義、如何様之金主勝手御座候共、輕目・悪錢等曾て吹立申間敷候、尤御役人様并願主九郎兵衛立合、吟味日々申請候て相違之義仕間敷候事、

右之外、御国内御作法ハ不及申上、諸御用向キ之義ハ万事願主九

郎兵衛指図申請候て、諸事我俣之取計曾て仕間敷候、為後日之砂鉄鑄錢金主御請書指上申候、仍て如件、

(加筆) ① 如何様之變等御座候て上納金も不相納鑄錢場も難取統体ニ御座

候ハ、

(加筆) ② 上納金之義ハ月割を以過減御立被下置、普請并元来指出候金、

是又月割を以過金之分ハ、後金主より相請取候様被仰付候共、

少も御恨申上間敷候事

(3-4 B1 31)

II (2) 7. 「明和五年六月 小澤九郎兵衛あて誓約証」

相渡申一札之事

一、貴様此度鑄錢座御用被 仰付候付、我等兩人御心腹之御相手

二可被成候由、書付御渡被下、於我等猶又此上少シも隔心無御

座候ニ付、一札相渡申候、為後日之仍て如件、

岩本万衛門 印

堀江平衛門 印

明和五子午年

六月廿五日

小澤九郎兵衛殿

〔貼紙〕
〔明和五年六月廿五日付〕

小澤九郎兵衛へ宛タル

岩本方右衛門ノ誓約証
堀江平左衛門ノ誓約証

(3 | 4 B1 18)

Ⅱ(2) 8. 〔明和五年六月 入用金借用証文〕

相渡申一札之事

一、此度、我等願之上鑄錢座蒙被 仰付候所、入用金不足二付、別紙以証文貴殿金子借用仕候、其旨趣は、此上鑄錢座引請御用内外御相談可申受候、弥右之筋御精密御働候上ハ、割合之表徳分壹分通勘定之表を以相渡し可申候、若又如何様之筋にて和談出来兼候ハ、右之別証文金子返済此表無滞可仕候、乍去此度別段之御世話申請候間、随分御相談相和諸事相調候様可仕候、為後日一札如此御座候、仍如件、

明和五年子六月

岩本方衛門殿

鑄錢座主
小沢九郎兵衛 (印抹消)
加判
堀江平衛門 (印)

(3 | 4 B1 19)

Ⅱ(2) 9. 〔明和五年九月 鑄錢座御用炭につき前金受取証〕

指上申証文之事

文金拾五両也 小粒

右鑄錢座御用炭、私共御請合申上候炭四千表為前金拝借仕候所実正二御座候、来四月中迄二正味八貫目入にて前書之表数相納可申候、尤時々相納申候節代金御渡被成候筈二御定申候、前金返納之義ハ、来春中表数相納御勘定相立申候節、炭代金にて御引取可被下置候、縦如何様之儀御座候共、少も違背申上間敷候、為後日村役人印形之証文指上申候、依如件、

明和五年

子九月

太田鑄錢座
御役所様

介川村
炭納人
久次平 (印)
同村
庄屋
弥市衛門 (印)
組頭
伊衛門 (印)
同
治郎平

(3 | 4 B1 24)

Ⅱ(2)10. 「明和五年九月 砂鉄勘定上納金につき定証文」

相渡申砂鉄定証文之事

一、砂鉄勘定利潤十之内壹割五歩御公納并諸入用ニ可引分、別紙証文相究申候所、万端貴殿御世話を以此御請負我々仕候間、右為謝礼壹割五歩之義ハ不殘貴殿へ御渡申上候て、右之内何程御公納ニ被成、余分御入用ニ御自由被成候共、於我々少も違乱無御座候、万一右等之筋を以私共不埒之儀申掛候ハ、請負方御引取被相止候共、少も違乱申間敷候、為後日請負方加印相添一札相渡申候、仍如件、

明和五年子九月

請負人 柏原六郎兵衛 印
金主 渡辺次左衛門 印
世話人 井澤幸八 印

御願主
小沢九郎兵衛殿

(3 | 4 B1 25)

但、別紙証文之通、鑄錢場納鉄直段之義ハ、江戸相場

え当所迄運送相掛壹割下ケニ相納、代金請取可申

候事、

外勘定筋

惣利潤十之内

壹割五歩ハ諸入用御公納ニ相引可申候事

錢八歩五厘

分 四分式厘五毛ハ金主方え可取定

式分壹厘式毛五勺、御願主兩人え可取定

式分壹厘式毛五勺、請負人六郎兵衛可取定

右勘定合少も違乱仕間鋪候、尤御公辺筋、私共義貴殿御両所御

召抱ニ被仰立候共、少も違背仕間敷候、尤万端之儀表証文之通

何成共相違無御座候、為其一札如此御座候、仍如件、

明和五年子九月

柏原六郎兵衛 印
渡辺次左衛門 印
世話人 井澤幸八 印

小沢九郎兵衛殿

堀江権兵衛殿

(3 | 4 B1 26)

相渡申砂鉄定証文之事

一、砂鉄一卷

Ⅱ(2) 12. 「明和六年十一月 鑄錢座徳用金渡方につき証文」

太田(割印)二において砂鉄鑄錢内々深キ御意味共有之候て、三ヶ年之年季願上候所、不存寄七ヶ年之年季被仰出候儀は、旁貴殿御心添二預候儀、此所難筆紙尽候、其上願相濟候上も金子等差支候故すでに願望も空敷可罷成所、郷村御救金貴殿御預り之内我等致拝借候二付、全ク御影を以大願も相調、広大之御恩儀にて可申謝様無之二附、内々貴殿も御小訊は有之候得共、鑄錢徳用願主拾四人二割候上にて、六人分徳用金は年々貴殿え相渡候筈、先達て証文相渡置候所、此度御入割申上、年々新錢六千貫文ツ、来刁より年季中相渡申候筈二御得心給、猶又忝御座候、依之先達て相渡置候証文并書附不殘此度新証文と御引替被下候上は、先達て相定候金主拾四人割合六人分貴殿徳用相渡候儀相止メニ罷成、就夫此度新証文之通相極候、依之此度御入割之通、年々新錢六千貫文宛相渡候筈、尤来寅正月より月割を以毎月貴宅迄附送相渡可申候、聊右之定二異乱之儀曾て無之候、万一如何様之變事有之候とも、太田座方より差出候錢之儀二有之候間、此証文を以御申聞可被成候、尤此定之趣、座方記録え相記置候二附、証文え割印致候、依新証文為後日如件、

明和六年丑十一月廿六日

金主共連判

錢座元々

小澤九郎兵衛

矢口平左衛門殿

(3 | 4 B1 33)

Ⅱ(2) 13. 「明和八年一月 入用金借用証文」

預り申金子之事

(抹消)

金三百両也
①

右は、鑄錢座入用金手支御座候二付御無心申入預り申所実正御座候、返済之義は被仰聞次第無遅滞相返可申候、仍て如件、

明和八年卯正月

預り人

小澤九郎兵衛

(抹消) ①

請合

大前仁兵衛

①

松田嘉介殿

前書金子利息之義は (後欠)

(3 | 4 B1 37)

II (2) 14. 「明和八年三月 鑄錢座調賦金受取証」

取通申証文之事

一、鑄錢願主二拙者儀も連成申候所、公辺は不及申座方御用筋貴殿御引請御取扱二御申合候上は、不依何事拙者え無御貪着万事御取扱可被成候、依て拙者え之調賦金貴殿思召を以当卯年より御年季中卷ヶ年分御割合金五百両之証文御渡給、千万忝申請候、此上拙者身分之儀難計候得は、万一之儀も御座候ハ、申請置候証文二不拘、子孫相統相成候様ニ御心添奉頼候、如斯証文御取通候上は違乱申間鋪候、為後日依如件、

明和八年卯三月

堀江権兵衛 ㊦

小沢九郎兵衛殿

(3-4 B1 38)

II (2) 15. 「明和八年四月 鑄錢座焼失につき願主宥免願」

乍恐以書付奉願候事

一、昨朔日朝六ツ時より、静明神之神輿碯出、供奉人共鑄錢場え押込候取沙汰相聞候間、幸 御頭様御止宿ニ付、右之旨御内意奉申上候所、左候ハ、座方・埜方惣人数へ下知仕、吹方も相止、随分無法之者共へ敵対不為仕、隱便ニ取扱候様被 仰付候

間、其旨屹下知仕、御酒造等数多用意為致指置候所、神輿を以真先キに立押入及乱防候、其砌兼て火之元下知は申付候へとも、埜方之義は元來数ヶ所火を取扱候場所、俄之事故消殘も有之候哉、其砌は北風甚烈候間吹散候て自然と火災ニ相成候義と奉存候、何レにも絶言語候義恐入奉存候、就夫昨日は亡前後候仕合故、何と可奉申上所存も無御座候所、今日ニ至漸夢覚候心知彼是考合候所、大元 御益筋ハ不及申、上御国民御扶助之一件ニも可相成候御儀ニ奉存、鑄錢奉願諸事都合宜取鎮候処、誠ニ此度之大変を存候得は、万人不帰服之義と相見、此処難尽筆頭恐入可奉申上ニは無言葉奉存候、猶又地鉄并出来錢壳錢荷造分、炭・米・松明諸色相積候ては、普請入用ニ不拘、凡金壹万両高及焼失候得は、此上焼鉄并錢相集候ても三ヶ一ニも難及奉存候、左候へハ所々才覚金払方如何可仕哉、此所甚無案氣、剩調達金指上置候金子も御座候へとも、拝借金も猶募大之御儀、何レとも此後は縦拙者へ蒙被 仰付候ても鑄錢場取立可仕様も無御座奉存候間、只 御仁恵之以御了簡、何方へ成共金子調達相成候族へ被為 仰付被下置候様、幾重ニも奉願候、尤私義ハ最早年老ニ及、猶又大業世話仕候故か、去年中より格別根氣悉相減、此上新ニ取立候義は、縦金子調達相成候ても更難取統奉存候、猶前件之通有來候金主共は、兼て御存知被遊候通、才覚調達も仕兼候者共ニ御座候間、此上相手取候事も難仕、彼是難義至極奉存候間、何分願主之義は御免被下置候様奉願候、重々

御仁惠之以御了簡、他え被 仰付被下置候ハ、難有御儀奉存候、仍て如件、

明和八年卯四月

願主
小澤九郎兵衛
(抹消) 印

御郡御役所様

(3 | 4 B1 41)

II (2) 17. 「明和八年六月 入用金借用証文」

金子借用証文之事

金五百兩
(印)

右は、鑄錢場取立金手支候ニ付、前書之金子借用仕候処実正也、御返済之義は、当九月吹立錢を以無相違相返し可申候、為後日仍如件、

II (2) 16. 「明和八年五月 入用金借用証文」

預り申金子証文之事

金千兩也
(印)

右は、無抛入用ニ付、前書之金子御無心申候て預り候所実正也、御返済之義は、当盆前無遅滞吃返弁可仕候、為後日仍如件、

明和八年卯五月

水戸太田
預り人
小澤九郎兵衛
証人
岩崎勘十郎
(抹消) 印

松田嘉介殿

(3 | 4 B1 42)

明和八年卯六月

山本作右衛門殿

(3 | 4 B1 43)

II (2) 18. 「明和八年六月 入用金等調達につき請書」

指上申鑄錢座御請書之事

一、鑄錢座内外引請座被 仰付相勤来候処、当四月朔日御用場・吹所并会所共ニ不残焼失仕候処、次第も御座候故其砌引請之義御免奉願候処、取扱之義は御用捨被遊候得共、公儀并定座等之御用向は被 仰付候間相勤可申旨奉畏候、仍此度御普請御入用諸色仕入内金主相立金錢無滞指出シ、此上御吹統相成候程之御

入用金は、私共内証金主申合調達御手支無之様ニ仕、御益金過分ニ相募候様ニ仕候ニ付、御吟味之次第左ニ申上候、

一、御勘定仕退六十日限 但老ケ年六度宛

一、日々出来錢御改之上、右捌方私并内証金主え被 仰付候上は、金壹両ニ付錢七貫弍百文之相場ニ勘定仕、鑄錢一卷諸入用願主・金主え被下金諸御入用何義ニよらず御勘定辻ニて御指引殘金御益ニ上納仕候、御益金壹万兩ニ都合不仕候節は、大金引請捌候事ニ候間、相場直違徳用之内より御益え相足シ、老万兩都合ニ指上可申候、若指引ニて老万兩過候分は、何程にても御益ニ可仕候、左候上は捌方ニ御貪着被遊間敷候、仍錢荷送候先々ニて運賃・駄賃は勿論破舟御座候節は、内金主并 上之御損ニ相掛申間敷事、

一、此度、御普請金・諸道具代・江戸表内入用、此三口別帳金高は御益金老万兩都合御勘定相立候節、右之内より被下候ハ、全ク御上之座ニ被 仰付候得共、此度之出金仕候義を以、御定年季中は御滞無御座、当時之通内金主持ニ可被 仰付旨難有奉存候事、

一、座方仕入金無滞指出可申候、若出金延引之節は別段ニ調達可被仰付旨奉畏候、其節違乱申上間敷候事、

一、地鉄仕入方・買方御吟味可申請候、尤御用場付入ニて御勘定可申請候、破舟等之義は不申上候事、

一、御益筋相過候様申上候上は、如何様之御益筋此上相過候願人

御座候共、御定之御年季中無恙御用向相勤候様ニ可被仰付候事、

一、御用場諸事御吟味之義は、御役所御取扱之御儀ニ候得は、内金主方ニて御貪着申上間敷候、若御不益之筋も御座候ハ、御内々可申上候事、

一、鑄錢御年季之内、若吹方御止ニ相成候ハ、跡取仕舞何分ニも執計可申候事、

右御定之趣被 仰付候上は、座方入用金并地鉄仕入金御手支等少シも無御座様ニ可仕候、尤御払錢一卷引請候上は、是又御不益無之様何分ニも執計御手支相掛申間鋪候、仍別紙御証文被下候間、御請証文如此指上申候、仍如件、

明和八年卯六月

小澤九郎兵衛

大前仁兵衛

菊池三之右衛門殿

大内茂兵衛殿

II (2) 19. [明和八年十一月 借入金返済につき願書]

乍恐以書付奉願候事

一、当四月御鑄錢場焼失後、御普請并諸事取立之砌、元金手廻仕

(3—4 B1 44)

兼候二付、毎度錢売口等世話仕候二付入魂之挨拶柄を以、駿州

清水山本作衛門と申者江戸表にて口入金頼入、兩度二千五百兩

調達仕、并当三月迄段々之金子出入指引残金三百兩、兩口ノ千

八百兩拙者借用仕、鑄錢入用操廻シ仕候所、当七八月迄ニは是

悲返濟可仕答申合ニ候得共、七月十三日より蒙 御呵閉戸仕

罷在候二付、拙者方へ右之届ケも仕兼、無是悲江^非戸表にて大吟

味御役所様え右之旨奉願候由、然ル所先月廿四日、右之山本作

衛門、神山繁衛門様え被召出、拙者方より於御国元私方より為

相願可申候旨被仰付候由、別紙作衛門書面写奉入御覽候通、右

之返金催促申聞候、然ル所、私義御鑄錢御用不相勤候得は、右

等之大金調達仕返濟可仕心当テ更ニ無御座難義至極ニ奉存候、

重々恐入申上兼候へ共、右之金子借用之義は全ク御鑄錢御用ニ

相拘候義ニ御座候間、先達て拙者相勤候内指出候金子之内御慈

悲之御了簡を以作衛門方へ返金被 仰付被下置候ハ、^偏難在

仕合奉存候、返金及遲滯此上及掛り合等ニ罷成、御上之御苦難

ニも相成候てハ、重々恐入奉存候間、只々御仁惠之御了簡幾重

ニも奉願上候、仍如件、

明和八年卯十一月

太田村百姓

九郎兵衛

右九郎兵衛奉願上候筋、御慈悲之御了簡を以願之通被為 仰付被

下置候ハ、村役人一同難有奉存候、仍如件、

太田村

くミ頭 与一右衛門

同 市十

同 次郎兵衛

同 庄十

同 次郎左衛門

同 平右衛門

年寄 小沢弥一右衛門

庄屋 小沢庄五郎

明和八年卯十一月

御郡御役所様

(3—4 B1 46)

II (2) 20. 「明和九年六月 徳用金配分につき訴状」

乍恐以書付奉御訴候事

一、此度江戸表小森介衛門と申者私方え難渋之義以書付奉願上候

二付、右返答可仕旨被 仰付奉畏候、依之子細左ニ奉申上候

事、

一、小森介衛門と申者え私知ル人ニ相成候分は、去ル亥年鑄錢願

目論御郡御役所様へ御内意奉申上、在府仕候て右一件ニ取懸候内、日々小石川 御屋形様へも罷出候処、其以前より江戸柳橋高柳三郎衛門と申者御蔵元并御国買穀江戸売場御免被成下候ハ、莫大之御益金可指上候旨、朽木屋清蔵と申者は数年御出入ニ付、此縁を以御願申上候所、売買筋之義得と理非御決談難被遊候由相延罷在候由、私滞留中鑄錢之義は逆も早速ニは難相分候間、右一件弥御益筋ニも可相成候哉、又は御故障之御義も可在御座候哉、其方商用之義は兼て鍛鍊之由ニ候間、右三郎衛門手添東金屋介衛門と申者此兩人え致直談得と承届候て可奉申上候由、再三 仰付候得は、私義鑄錢大願指上置、又々別義ニ取懸候義は蒙御免許度旨再三御辞退奉申上候所、右大願ニ付候ても、悉 御上之御勞難ニも相成候間、却て御益筋ニも相成候義、其方働を以首尾相調候得は、却て御奉公ニ相成申候道理ニ候間、随分出情取懸可申候旨蒙御下知、誠ニ難默奉存候て御請仕、早速願主高柳三郎衛門手添東金屋介衛門兩人え初て近付ニ罷成其後数度応対仕、小石川表えも右之分ケ合一々奉言上候処御聞届被為遊、先御益先納金千兩可被指上候哉、蒙御内意候間、右之旨三郎衛門え入割承知為仕、右千兩御用ニ為相立申候処、三郎衛門義は多病ニて時々小石川表御用筋ニも往来難義仕候由ニ付、手添介衛門義も三郎衛門願仲广之体ニ取通シ、此節より高柳三郎衛門小森介衛門と一同名字も相名乗、段々御用筋相勉申候様ニ罷成候、此節も介衛門方ニては金子調達等決

て不仕、上納金其外穀売場普請金内々諸入用金等迄一円二三郎衛門出金仕候義御座候、右御買穀御用被 仰付候節、右兩人御蔵元并江戸売方、私義ハ御国并他所米等買方之義、私方へ御取分被仰付難在御請仕罷在候砌、鑄錢願相濟候ニ付、江戸滞留中ハ勿論御国元へ罷下候ても悉昼夜御用筋混雜仕候間、右御買穀御用之義は御宥免被成下、右兩人之外鳴澤村兵左衛門・小口村祐七と申者兩人へ私跡役被為仰付、當時以相勉候所如何様之御義ニ御座候哉、右三郎衛門介衛門兩人之義は御蔵元迄御取上ケ被遊候由、其後之義ハ相拘り不申候間、更ニ不奉存候事、右之次第ニ付東金や介衛門えは時々出合仕候間、心易キ挨拶柄ニ罷成候事ニ御座候事、

一、此度介衛門奉願候書面ニては、金錢金主申合之義帳面等も相渡し置、介衛門老人え相任置候様取繕申上候得共、亥年より子四月廿九日、蒙 御免許候迄之内金主申合候義は所々掛ケ合候間、仮之仕用帳数冊拵置、縁を以頼候方えは何ケ所えも相渡し置、金子調達も可相成候ほとこの族えは時々手筋より内談いたさせ申候義、中々以介衛門等老人之働之様ニ奉申上候ハ、跡形も無之候義ニ虚言御座候、扱又前件奉申上候御買穀御用引請仲广之義故、時々対談候節、深川楠後文蔵と申者、前々は分限宜者ニ候処、当時金子不廻ニ付引込罷在候へとも、元来大金も取扱候者故、右等金主ニ相成候ハ、段々と其縁を以能金主申合も出来可申候由、介衛門申聞候間、左候ハ、一卜先近付ニ相成

頼申度候由、介衛門〔相頼候ニ付〕へ相頼、則文蔵手代甚兵衛と申者へ引合、其後文蔵へも引合具申候、然ル所、銅屋太兵衛手代清次郎と申者定座銑入口等も仕、鑄錢筋悉功者ニ御座候間、此者も引添申方〔懸〕ハ、可然候由、此者えは本庄二ツ目伊豆や義七入魂之由にて、此者を以清次郎へ懸ケ合、右清次郎より関岡五郎兵衛手代与市と申者へ及相談候所、是又承知仕、因茲楠後文蔵・関岡五郎兵衛・銅屋太兵衛三人金主と相定メ申候、其後割合等色々応対数變御座候内、右金主三人と私老人之の取合へ仲立候者、朽木屋清蔵・東金屋介衛門・伊豆屋義七三人其後槻木太郎右衛門と申者相加、都合四人中立申候処、江戸者之風義にて願主之私手詰メニ相成候得は、割合いか様とも相成候様ニ存申候て、相談埒明不申候様ニ相見へ申候、他え相談可仕候旨、幸ニ其後ニ至候てハ能金主共も内々申入数多御座候間、他へ相談可仕旨申放候ても一応相談ニ相掛候義、左様氣難にも罷成候など、菟や角日を送候内、五月朔日從 小石川鑄錢御免蒙御下知、先納金可指上候旨被 仰付候、因茲時々入割手を放候共、又は先納金指上相究候共可仕旨申達候得とも、菟角二右三人え所々之仲立候者三四人日々所々え寄合、介衛門歩菟角一ト通り相極候分ケ歩之義もくり返シ及變改、色々難渋埒明兼候ニ付、其旨小石川表へ御内意奉申上、今日上納不仕候ハ、金主之内談取放候様ニ御下知可被下置候旨願上候所、御慈悲を以皆川与太夫様〔懸〕を以右金主共え相談不相決候ハ、破談仕候共、又は先金上納仕候と

も、今日限りニ九郎兵衛方迄挨拶可仕旨御權威を以御糺被仰付被下候故、漸其夜関岡五郎兵衛才覚仕千両相調置候旨与太夫殿迄入御見分、漸五月四日小石川表水樋橋限鱧茶屋裏座敷ヲ借り、右之所え金主楠後文蔵・関岡五郎兵衛・銅屋太兵衛三人手代清次郎・与市・甚兵衛右六人と私老人出會仕、証文取極仕、前金千両御上納も仕、此一併相済申候、此節は仲立三人之者共ハ一円出席も不仕候、其後俄ニ龜井町清次郎宅ヲ會所と相定、金主私共寄合、職人召抱一件諸道具取揃相求候一卷、此表へ罷下り吹場普請之目論等諸色日々及判談候、然ル所前金貳千五百兩御定候所千兩相納、殘千五百兩并二元来より願ニ付諸入用金・吹場入用金等調達出来兼、段々と相延漸六月廿五日江戸出立ニ罷成、銅屋太兵衛金主惣名代二同道仕当所え七月四日着仕、夫より吹場一件ニ取懸り申候義毛頭相違無御座候、右龜井町寄合之内右仲立三人之者とも折々見舞ニ罷出候義ハ相違無御座候事、

一、右之趣ニ御座候得は、楠後文蔵ヲ私え引合候ハ介衛門働、銅屋清次郎を引合候ハ伊豆義七働、其外歩分入割ニ取懸取極候節ハ朽木屋清蔵・槻木太郎右衛門働、右四人同様之事ニ候間、罷下候節相応之謝礼も可仕奉存候所、最早願相済候上勝ニ乗候て、中々以小金にては承知不仕趣ニ相聞候、然ル所金主共元来貯金無之調達にて計金主ニ相成候事故、金子入用筋ハ何成共金主共引請可申答之極ニ候へとも指当候事さへ調達間に合兼申候

趣故、右三人謝礼金も才覚相渡兼候間、無扱鑄錢德用十四割壹分五リン右三人え可遣候趣、槻木太郎右衛門請判にて証文相渡し罷下り申候、尤太郎右衛門ハ別証文にて相究申候、此後右三人之金主共一円取統兼候て既ニ成就難相成体ニ罷成候間、遠藤安兵衛・釘屋九兵衛・松田嘉介三人金主へ相加、其外間に合兼候金子ハ私引請、御郡御役所様御調達金其外江戸・水戸内之知音之手筋を以私一分にて莫大之大金才覚仕、漸寅ノ九月迄二元金高取納候様ニ出情仕候、然ル所丑年より助右衛門等右四人之者共ハ初年より徳用有之候事之様ニ存候て、理分相望候段以之外不了簡之義ニ御座候、併右四人悉困窮仕当用及難義候由、松田嘉介方迄内々入割御座候付、寅五月右老分五リンの割歩可取株売申度旨私方迄申聞御座候間、江戸表にて金子調達仕、右之株買取以來鑄錢一件無相構三人連印証文相請取金子貳百五十兩相渡し申候、尤介衛門書付ニ理金之内貳百五十兩請取候旨申上候は是等之義ニ御座候哉、右三人懐合之事ハ更ニ不奉存候へとも表向キハ三人連印にて証文取極金子相渡し申候ニ毛頭相違無御座候、仍之

鑄錢理分十四割之内老分五リン

右可相渡元証文写老通

同

右寅五月買帰し申候証文写老通

ノ式通

右式通之証文写此度奉入御覽候

右之趣ニ御座候得は、今更介衛門何義も可奉願等は無御座様奉存候、趣^元仲立四人之内介衛門之外三人は貳百五十兩相渡候後礼状等も遣候、當時以更ニ何之筋ニも申聞無御座候、只介衛門壹人抽御勞難之筋奉願候段不届至極之様ニ奉存候、猶又元来金子壹分錢百文も出鑄錢ニ付出金無之、只金主楠後文蔵へ私ヲ引合候と申計之義にて、右大金を取候も莫大之仕合、ケ様之大業ニ無御座候ハ、右等之事可在之道理も無御座候、誠其節ハ挨拶柄之様にて咄し合今更願主・金主等之様ニ割合可取なと、相目論候不束、其上右之存心も御座候ハ、元来鑄錢取極候節、小石川表えも罷出鑄錢方何故之懸り仕候とも、願主・金主一同申立御下知等も申請置候等之義其節は顔出しも罷成候内々之咄合にて、今更御勞難之御義奉願候段、是以不都合至極方々難得其意奉存候、若去卯四月鑄錢場類焼之砌、株買帰証文焼失とも存候て難渋申出候哉、何レにも不束至極之者ニ奉存候間、乍恐御了簡之上宜被仰付被下置候様奉願上候、仍如件、

附り、末文ニ丑年より寅年卯三月迄鑄錢空積候勘定理分等書上候義は元来不存候事とハ乍申、甚以異同至極可申上様も無御座候、尤乍恐御用御吟味御用筋も無御座候御事かに奉存候間、一々相違候返答書も仕指上ケ不申候

事、

明和九年

〔辰〕
卯六月

鑄錢先願主太田村
九郎兵衛

右江戸表小森介衛門指上候書付之表、当村九郎兵衛へ返答書可申付旨御下知奉承知候間、則申附此度為書上申候、元来之義は当村役之私共更ニ不奉存候へ共、介衛門・義七・清蔵三人連印申候証文見届相違無御座候間、此度写書相添為指上申候、仍末判如此御座候、以上、

組頭六人

年寄

庄や

〔ママ〕
明和六年

辰六月

御郡御役所様

(3 | 4 B1 47)

II (2) 21. [明和九年十一月 鑄錢座調達金引上げにつき願書]

(前欠)

御益金上納も御座候間、縦調達金從 御上御下ケ御延引有之候ても、上納之指引ニ相立其方難義ニ相拘候義更無之候間、印形仕、御手支急御用間を合候様ニ御入割被仰付候間、御下知難相背、御役所様御調達金え私拝借之印形は指上置申候

得共、右御役所様御調達金之義は、私勝手用ニ金老分たりとも御預申候義曾て無御座候、只御役所様にて御都合御上納被遊候分計、其節々御達シ御座候ハ奉承知候義ニ御座候、左候

得は私名前ニ相成調達指上置候金子之内、御役所様御調達何程私調達何程と御引分ケ可有御座奉存候、其筋故、去年より当時迄元金之義ハ不及申上、御利足ニ至迄、更ニ御上納不被仰付候、左候得は鑄錢場より御引上ケニも相成候哉と奉存候、此上御役所様御調達金御引上相濟、其後私調達金えは、乍恐如何様共 御仁恵被 仰付候哉と奉存候迄にて打過候間、右之元金・御利足等之御勘定如何様ニ相立申候事ニ御座候哉、更ニ不存弁罷在候、此外之筋可奉申上分ケも無御座候間、有体奉申上候、

右之趣ニ御座候間、何分御慈悲之御了簡奉願上候、仍如件、

太田村

九郎兵衛

明和九年辰十一月

(3 | 4 B1 48)

II (2) 22. [〔明和期〕七月 砂鉄ならびに鉄値段指出方書付]

御前御用品鉄・砂鉄先達て両度御納御座候所、此度代金被下置候段御達御座候、右ニ付候ては鉄直段拾貫目ニ付何程とも不相分候、仍て前書商品共ニ直段付御用ニ有之間、銘々書付にて明日中